◆馬寮東方地区の調査 ―第298次

1．はじめに

平城宮の第一次大極殿の西、馬寮との間には周囲を築地塀で囲われた大規模な区画があり、馬寮東方地区と仮称している。平城宮跡発掘調査部では、この馬寮東方地区について継続的な発掘調査を行なってきた。最初の第37次調査（1967年）では、南辺の掘立柱塀と東西に庇が付く南北棟礎石建物SB5300の南半部を検出した。第52次調査（1968年）と第63次調査（1970年）では、西辺と北辺の築地塀を確認した。次いで第194次調査（1988年）ではSB5300全体を調査し、柱間寸法が約4.2m（14尺）で桁行が21間、全長が90m近くにもおよぶ長大な南北棟礎石建物であることが判明した。第191-13次調査（1989年）では区画の西辺部に礎石建物の一部である南北方向の布掘りと14尺間隔に並ぶ礎石根石２ヶ所を検出した。第239次調査（1993年）では中央部に正殿と思われる東西棟礎石建物SB15750を発見した。SB15750は南の庇を確認したが、北にも庇が付くものと考えられる。この調査では三彩小塔の一部となる黄釉六角形屋蓋が出土した。これは正倉院伝存のものと同じで、平城宮で出土したのはこの1点のみであり、馬寮東方地区の特殊な性格をうかがわせる。第244次調査（1993年）では、正殿の北に南北に庇を持つ東西棟礎石建物SB16320の一部を検出し、これは後殿と考えられる。この結果、この地域は正殿を中心として、北に後殿、東西に脇殿を配するという施設であることが判明した。これら４棟の礎石建物は、すべて柱筋に「布掘り」の基礎地業をした後に礎石を据えて建物を建てる工法と、柱間寸法が桁行方向は14尺、梁間方向は10尺である点で共通している。建物配置とも合わせて、ここが特殊な性格を持つ一画であると推定でき、『続日本紀』に記載のある「西池宮」の可能性が指摘されていた。

今回の調査地は、西脇殿東半の南半部がかかる地域にあたる。西脇殿は第191-13次調査でその一部を検出しているとはいえ、第37次調査区では明確な形では確認していない。しかし、第37次調査区では南北方向のバラス列SX5333をSB5300と南端を揃える形で検出しており、これが西脇殿関連の遺構であると考えられた。今回の調査は西脇殿の規模を推定するとともに、正殿の東西規模を確定することと、周辺の状況を明らかにすることを目的として行なった。当初の面積は約880m²で、37次調査区に220m²の拡張区を設け、合計1100m²となった。調査期間は1999年1月7日～3月22日である。

2．検出した遺構

西脇殿SB18000　調査区西半で、南北方向の布掘りを３条検出した。東の２条は幅約2.5mで、中軸線間の距離は約３m（10尺）ある。布掘りの内側には、拳大のバラスを一面に敷きつめている。その西側、調査区の西端には、約６m（20尺）の間隔を置いて布掘りとバラスを部分的に検出した。この３条の布掘りは第191-13次調査で検出した布掘りと一連のものであることはほぼ確実であり、前者は東の側柱、入側柱と西入側柱で、後者は西側柱にあたる。これによって、西脇殿は東脇殿SB5300と同じく、東西に庇を持ち、柱間寸法は桁行方向が14尺、梁間方向は10尺の礎石建物であることが判明した。西接する第52次調査区では、西雨落溝と考えられる南北溝を検出している。なお、西脇殿には第193-13次調査で既にSB13520と遺構番号を付しているが、今回新たにSB18000と番号を付け直した。

SB18000は南北端ともに調査区外に延びており、建物の規模を推定するため、南接する第37次調査区を再発掘した。その結果、SX5333は西脇殿の東側柱と入側柱のバラス列および布掘りであることを確認するとともに、南妻の布掘りも検出した。すなわち、SB5300とSB18000は南妻を揃えることが判明したのである。北はまだ調査していないので不明であるが、西脇殿SB18000は東脇殿

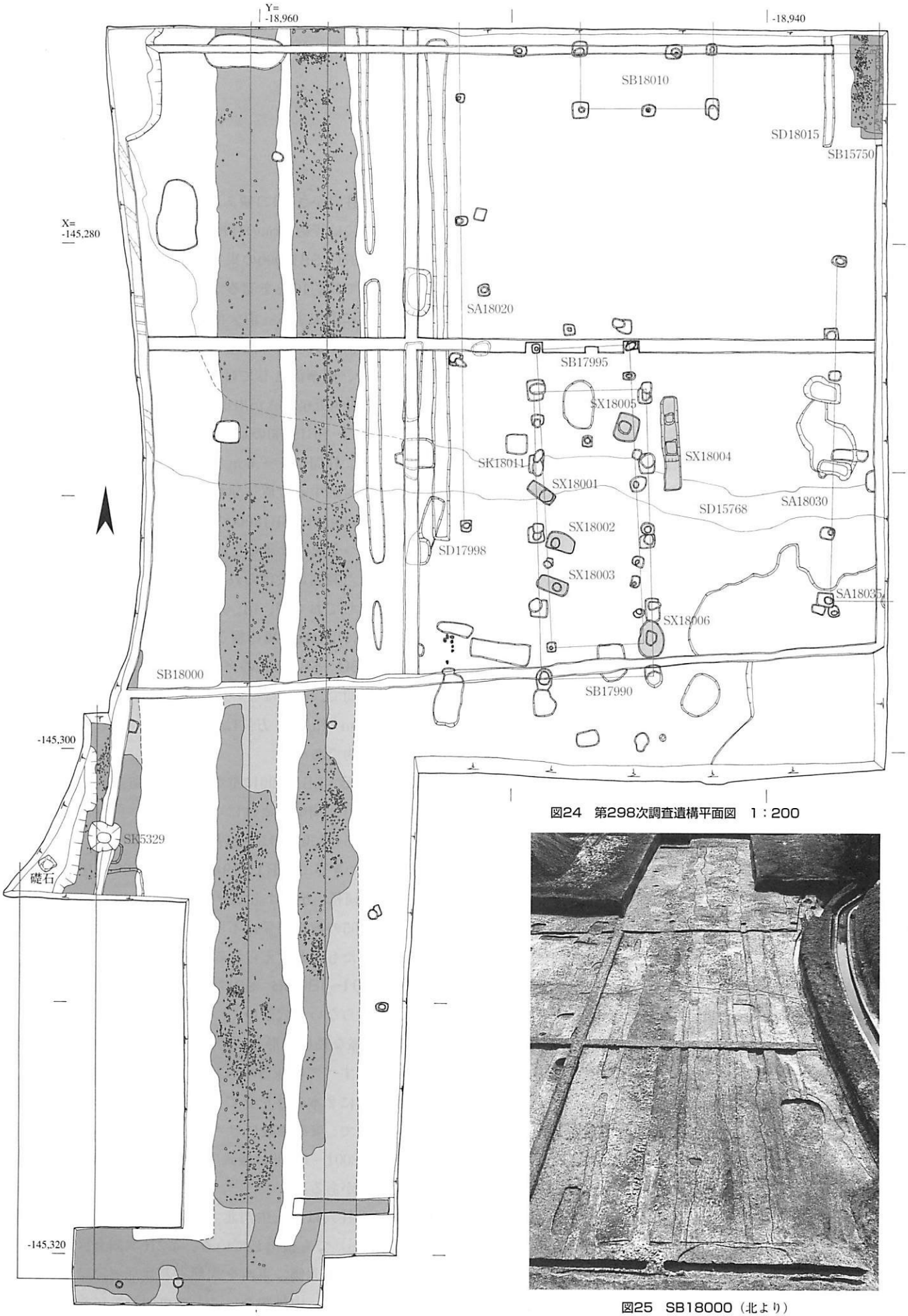

図24　第298次調査遺構平面図　1：200

図25　SB18000（北より）

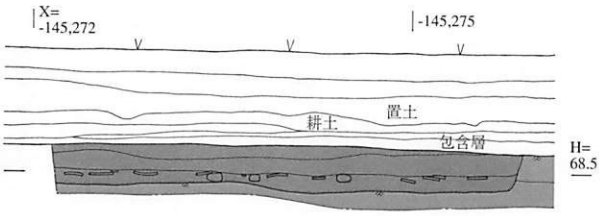

図26　SB15750布掘り土層図　1：60

SB5300と正殿SB15750をはさんで対称の配置にあることから、東脇殿と同じく桁行21間の長大な南北棟建物である可能性が高い。第63次調査区では、北と西の雨落溝と推定される溝を検出しており、この想定を裏づける。

今回の調査区は全体的に削平が著しく、布掘りは深さ約5cmほどしか残っていない。検出したバラスは底に敷きつめていたものがかろうじて残っている状況で、礎石の位置を示す根石は失われている（図27）。布掘りの埋土からは平城宮土器Ⅱ～Ⅲ古段階の須恵器杯B蓋が出土した。SB18000の布掘りの幅は約2.5mあり、SB5300が約1.5mであるのに対してかなり広く、かつSB5300では底にバラスを敷いていないなど、地業の施工法に違いがあるが、これは工法差として理解できる。

なお、西入側柱の布掘りの西には径約1mの石が水路に落とし込まれた状況であり、これは礎石であろう。石のすぐ北東には土坑SK5329があり、これは西入側柱の布掘り内で、南から4間目の柱位置にあたる。SK5369は本来この位置にあった礎石を抜き取った穴であると考えられる。建物の時期は、出土した瓦と土器などから、奈良時代前半に建てられ、その後奈良時代を通じて存続していたと考えられる。

正殿SB15750　調査区東北隅で、南北方向の布掘りを検出した。これは第239次調査で検出したSB15750西妻の布掘りの西南角にあたり、東西5間の規模であることが確定した。削平が著しく、検出面には径約3cmのバラスや瓦が敷きつめてあるが、礎石根石は残っていない。布掘りは深さ約20cm残っており、版築層は3層確認できた（図26）。底に1層版築土を積んだ上に完形に近い平瓦を一面に敷いており、これは根固めであろう。布掘り内からは平城宮土器Ⅱの須恵器杯B蓋が出土した。西約2mには西雨落溝SD18015があるが、南雨落溝は削平のため失われている。

SB18010　SB15750の西にある南北棟掘立柱建物。今回はその南端1間分を検出した。南妻がSB15750の南側柱列に揃い、約6m（20尺）の距離にあることから、密接な関係があると思われる。柱間は桁行が2.4m（8尺）、梁間が2.55m（8.5尺）。桁行が仮に5間であるとすると、桁行総長は40尺となり、これはSB15750が南北に庇が付くとした場合の梁間総長に一致する。西側柱の西8尺には柱筋を揃える柱穴がさらに1個あり、西に庇が付く可能性もある。妻柱には径約10cmの柱根が残る。

SD17998　SB18000の東方にある南北溝。幅約60cm、深さは北では約10cmを測るが、南は浅くなり、途中で削平のために消失する。消失部には石の抜取状の小穴が並び、石組溝であった可能性もある。SB18000との距離は約4.5mで、雨落溝としては離れすぎており、排水路か。埋土から軒丸瓦6225Aが出土した。

SA18020　SB18000の東方にある掘立柱南北塀。3間分検出した。柱間は5～6mと、一定しない。第194次調査区でも、対応する位置に建物の東妻とみている柱穴列がある。SA18020はSB18000の足場穴としては離れすぎており、かつ全面には通らない。第194次調査区では正殿を中心とした範囲に設けられているので、目隠し塀的な機能を想定しておくが、第一次朝堂院地区で検出した様な騎射行事に用いた馬場の柵という可能性もある。

SB17990　SB18000の東方にある南北棟掘立柱建物。桁行は4間で、妻柱はない。柱間は桁行が2.85m（9.5尺）、梁間が4.5m（15尺）。方位は北でやや西にふれており、仮設的な建物であろう。

SB17995　SB17990に重なる位置にある南北棟掘立柱建物。桁行4間で、妻柱はない。柱間は桁行方向は一定せずに2.85～3.3m（9.5～11尺）、梁間が3.9m（13尺）で、柱穴の大きさはSB17990に比べて小ぶりである。SB17990同様、方位は北でやや西にふれている。SB17990とSB17995の前後関係は不明であるが、仮設的な建物を建て替えたものと考えられる。

SX18001～18006　SB17990・17995の周辺には、建物にまとまらない柱穴がいくつかある。形態は、SX18001～18004の様な長楕円形と、SX18005・18006の不整円形があるが、すべて柱抜き取り痕を持つ。SX18004は細長い掘形の中に2本の柱を立てた痕跡が残る。この場所は正殿の前面で、東西脇殿にはさまれた広場にあたることから、SX18001～18006は儀式の際に立てた旗竿の柱穴である可能性がある。

同様の柱穴は、壬生門北方の第216次調査（『1990年度平城概報』）でも検出している。第216次調査区は壬生門を入ったすぐ北側、東西を式部省と兵部省にはさまれた広場にあたり、中軸線をはさんで東西対称に旗竿の柱穴

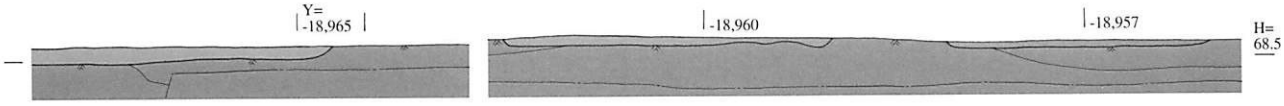

図27　SB18000布掘り土層図（X=-145.318付近、南から）　1：60

が並ぶ。SX18001～18006に関しては、中軸線で折り返した東側の位置は第194次調査区と第239次調査区の間の未発掘地にあたり、東側にも同様に柱穴が並ぶかは不明である。ただし、SX18006については第37次調査区で対応する穴を検出している。

SA18030・18035　調査区東辺にあるＬ字形の塀。南北塀SA18030は柱穴を検出していない部分もあるが、柱間は2.7m（９尺）に割り付けられ、５間になると思われる。南端で東西塀SA18035に連なる。SA18030は第239次調査で検出した南北塀SA15769と正殿をはさんで対称の位置にある。

その他、SD17998の西には数基の土坑が南北に並ぶ。いずれも埋土の下層には有機物を含んだ暗茶褐色の土層が堆積し、塵芥処理用の土坑と考えられる。

SD15768　調査区を東西に横切る古墳時代の流路。西半は整地土と布掘りの下にあり、全体は検出していない。調査区東辺部では１条であるが、西壁付近では数条の流れが認められ、流路を何度も変えていたようだ。西壁で、古墳時代の小型丸底壺が出土した。

３．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は極めて少ない。これは、遺構面が大きく削平されていることによるものであろう。瓦は表４に集計を載せておいたが、軒丸瓦が29点、軒平瓦が９点あり、Ⅱ～Ⅲ期のものが中心である。土器は、SB18000の布掘りとその周辺の整地土から平城宮土器Ⅱ～Ⅲ古段階のものが出土し、この地域の建物の造営年代を知る上で注目される。他には、SB18000東方の広場にある土坑SK18011から神功開宝が１点出土した。

なお、第37次調査区で検出した土坑SK5283からは550個体以上の土器が出土した。これらの土器はほとんど全てが須恵器であり、その中でも杯B蓋が主体を占める。この様な構成の土器群は平城宮・京内では例をみないものであり、後に別項を設けてここで合わせて報告する。

４．調査の成果とまとめ

第37次調査区検出遺構の再検討　今回の調査により、これまで詳細が不明であった馬寮東方地区の西脇殿が確かに存在し、しかも東脇殿SB5300と同規模の、東西庇付で桁行が21間という長大な南北棟礎石建物である可能性が非常に高くなった。第37次調査の成果は既に概報で簡単な分析がなされている（『平城宮第35～37・40・41次調査概報』）が、検出した遺構を再検討してみると、SB18000の他にもこの地区に関連する施設が新たにいくつか指摘できる（図28）。これらについては、今回新たに遺構番号を付し、ここで報告することとする。

表４　第298次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6225	A	1	6664	C	1
	?	1		?	1
6285	A	1	6671	C	1
6291	A	3	6681	B	1
6301	C	5		?	1
型式不明		18	型式不明		4
軒丸瓦計		29	軒平瓦計		9

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他	
重量	166.9kg	521.1kg	0.5kg	0.1kg	面戸瓦	3
点数	1,907	6,429	2	1		

まず、南限の施設に関しては、南辺の基幹排水路SD5280のすぐ南にSA5270があり、そのさらに南方にはSA5260と計２条の掘立柱塀がある。SA5270については柱穴も小さく、仮設的な塀と考えられ、SA5260がある時期の南限の区画施設であろう。SA5260は一部未発掘区にかかるため、全体を調査したわけではないが、当然検出できる位置に柱穴を見つけていない部分がある。ここは、ちょうど正殿SB15750の南面にあたることから、この場所に既に削平されていて遺構としては検出できなかったものの、礎石建ちの門があったと考えられる。門の規模は、柱穴のない範囲から東西５間と推定される。柱間は、後述する南面築地SA5265心上に東西に約３m間隔で並ぶ小穴列があり、これを足場穴とするならば、桁行方向は10尺にとれる。梁間方向については不明。

また、SA5260の北約2.5mには柱間が約2.7m（９尺）の掘立柱塀SA5340がある。この塀は柱穴の大きさが約0.3mほどしかなく、調査区西半分では南方約1.5mに柱筋を揃えた柱穴列がさらにあることから、築地の寄柱か添柱である可能性が高い。即ち、この一画は南面の閉塞施設も築地なのであり、SS5321（SA5340を改称）[注)]を北、SS5321を南添柱（寄柱）とする基底幅6尺程度の築地SA5265を新たに想定する。掘立柱塀SA5260は築地SA5265に先行する仮設的なものであろう。SA5265は南門部分ではSS5321を検出しておらず、築地にも礎石建ちの南門が開

くと考えられる。しかし、掘立柱塀から築地への改修時に南門はそのまま存続したのか、位置をずらして建て替えたのかを判断する材料は全くない。

SB5300の西には、東西棟掘立柱建物SB5310の東半分に重なる位置に、3条の東西溝と2条の南北溝が連なるSD5293と1条の南北溝SD5277がある。これらの溝を合わせると、方形の区画で南に張り出しがある形となる。これは、SD5277・5293を地覆石抜き取り溝とする、南面に階段がある礎石建ち基壇建物であると考えられ、新たにSB5305とする。SB5305の基壇西辺は正殿SB15750の東妻と筋を揃え、両者の距離は約30m（100尺）となる。基壇の南辺、北辺は、それぞれSB5300の南から2間目、4間目の柱筋にほぼ揃える。東辺は後殿SB16320が東西11間とすれば、その東妻に揃う。こうした計画的な配置が想定できることからも、ここに基壇建物があった可能性は高い。なお、SB5305と中軸線をはさんで西の対称の位置には浅い落ち込みSX5308があり、これは基壇の掘込地業で、ここにも同規模の建物が存在していたと推定される。この様な東西に並立する小規模な基壇建物は、第二次朝堂院南門の南方の広場でも検出している（『1995平城概報』）。ここの広場でも儀式用の旗竿を立てたとみられる柱穴列を検出しており、馬寮東方地区との類似性がうかがわれ、興味深い。

西脇殿SB18000の南には、西を揃える形でSD5280に架かる橋SX5330がある。東脇殿SB5300の南にも2個の東西方向の柱穴列SX5254があり、全体は検出していないものの、ここにもSD5280に架かる橋があったと思われる。

多量の土器を出土した土坑SK5283は橋脚の抜取穴であろう。

遺構の変遷　これまで分析してきた様に、馬寮東方地区には4棟の大きな礎石建物が建ち並ぶことが明らかとなった。東脇殿SB5300については、基壇北部を横切る東西溝との関係から3期にわたる変遷が想定されているが、正殿SB15750、後殿SB16320、西脇殿SB18000については未調査部分が多いために不明である。南面の区画施設は、まずSA5270で閉塞した後にSA5260を作り、次いで築地塀SA5265に改作した。西、北面築地については、先行する掘立柱塀の有無や構築時期に関する判断材料に乏しい。

礎石建物の建設は、整地土や布掘りから出土した土器および瓦の年代から、奈良時代当初まで遡るものではなく、ある程度時期をおいてから建てたものと考えられる。布掘り埋土の出土土器から、正殿の建設は西脇殿に先行する可能性があるが、天平年間前半代には既にこの地域は整備された状況になっていたものであろう。これらの礎石建物の廃絶時期は不明であるが、建物と重なる遺構を検出していないことから、奈良時代を通じて建っていたものと考えられる。SB5305に関しては掘立柱建物SB5310と重複しており、前後関係は不明であるが、存続時期はやや短かったのであろう。

なお、SB18000の北端部が想定される位置には第63次調査でSB6487・6500の2棟の南北棟掘立柱建物を検出しており、SB6500は奈良時代中頃、SB6487は奈良時代末の時期とされている（『学報XII』）。しかし、両建物ともに北面築地SA6510の南雨落溝SD6507、西面築地SA6150の東雨落溝SD6151と一部が重なり、溝よりも古い。SD6151からは平城宮土器II～IIIのものが出土しており、SB18000を建設する以前のものであると推定できる。

全体の配置計画と性格　馬寮東方地区の区画全体の大きさは、南北が北面築地SA6510と南面の掘立柱塀SA5260間で約119m（400尺）となり、南面築地SA5265との間ではやや短くなる。東西規模は東面築地をまだ検出していないので不確定であるが、中軸線で折り返すと約113m（380尺）の距離をとることができる。礎石建物の配置は、中央に桁行5間で南北に庇が付くと推定される正殿SB15750があり、その東西に桁行21間で東西庇付きの脇殿SB5300・18000が対称に並ぶ。正殿の北には、南北庇付きの東西棟で、SB5305との関係から桁行が11間の可能性が高い後殿SB16320があり、後殿の北側柱と東西脇殿の北妻は柱筋を揃える。各建物間の距離は、正殿心と後殿心間が100尺で、正殿と東西脇殿間は心々間でそれぞれ130尺という完数値をとる。また、先述した様にSB5305も各辺が正殿、後殿、東脇殿と揃う関係にあり、全体として非常に計画的な配置をとる（図29）。

これまでの平城宮の調査で、建物配置がある程度明らかになった官衙の配置をみると、兵部省、式部省、塼積基壇官衙（太政官か）の左右対称かそれに近い配置のパターンと、宮内省、馬寮、大膳職、内膳司、造酒司などの左右非対称配置のパターンに大きく分けることができる。非対称配置の官衙は、造酒司の調査で既に指摘されている様に、実務的な性格が強い。建物配置は左右対称

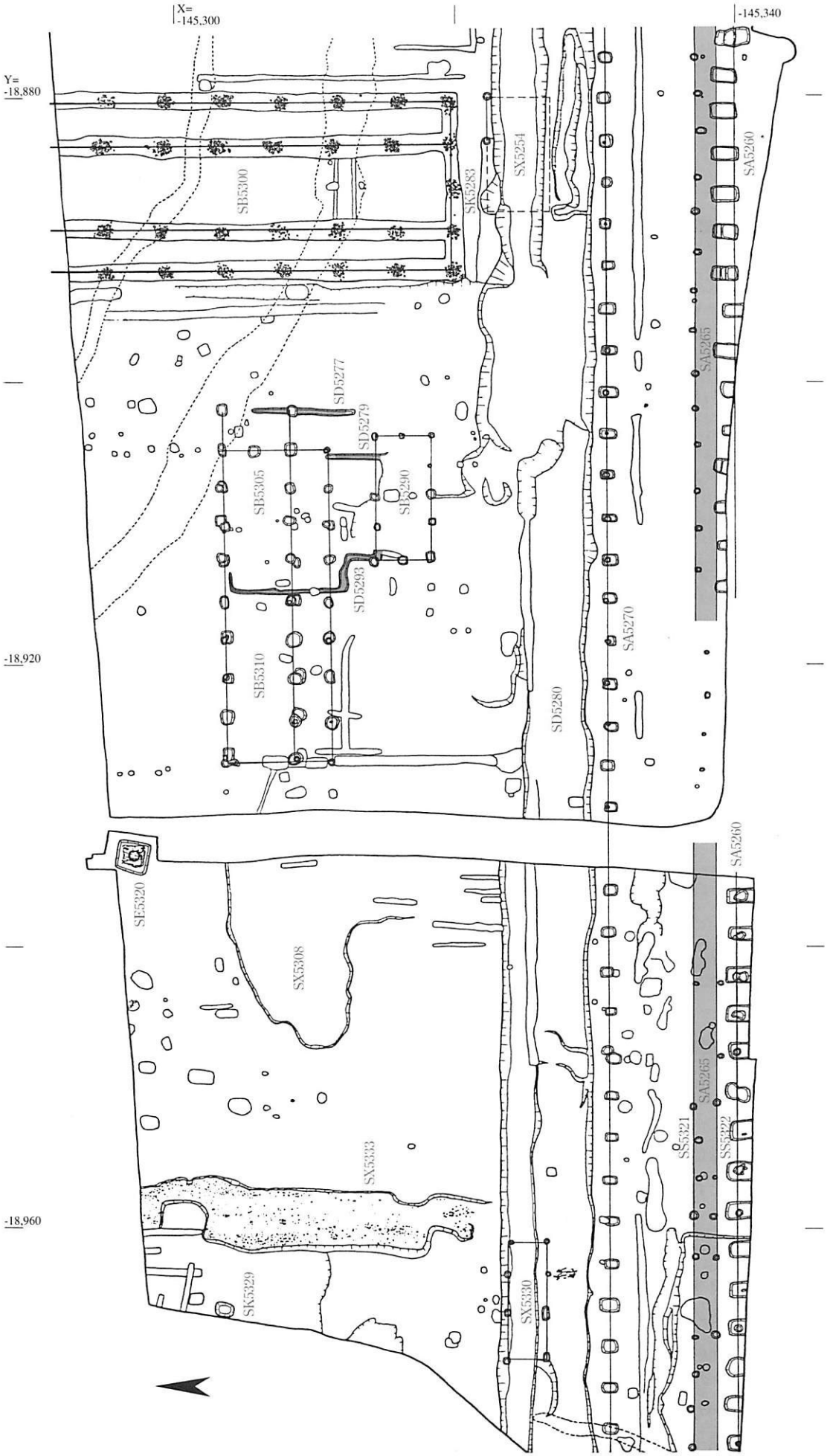

図28　第37次調査　主要遺構平面図　1：300

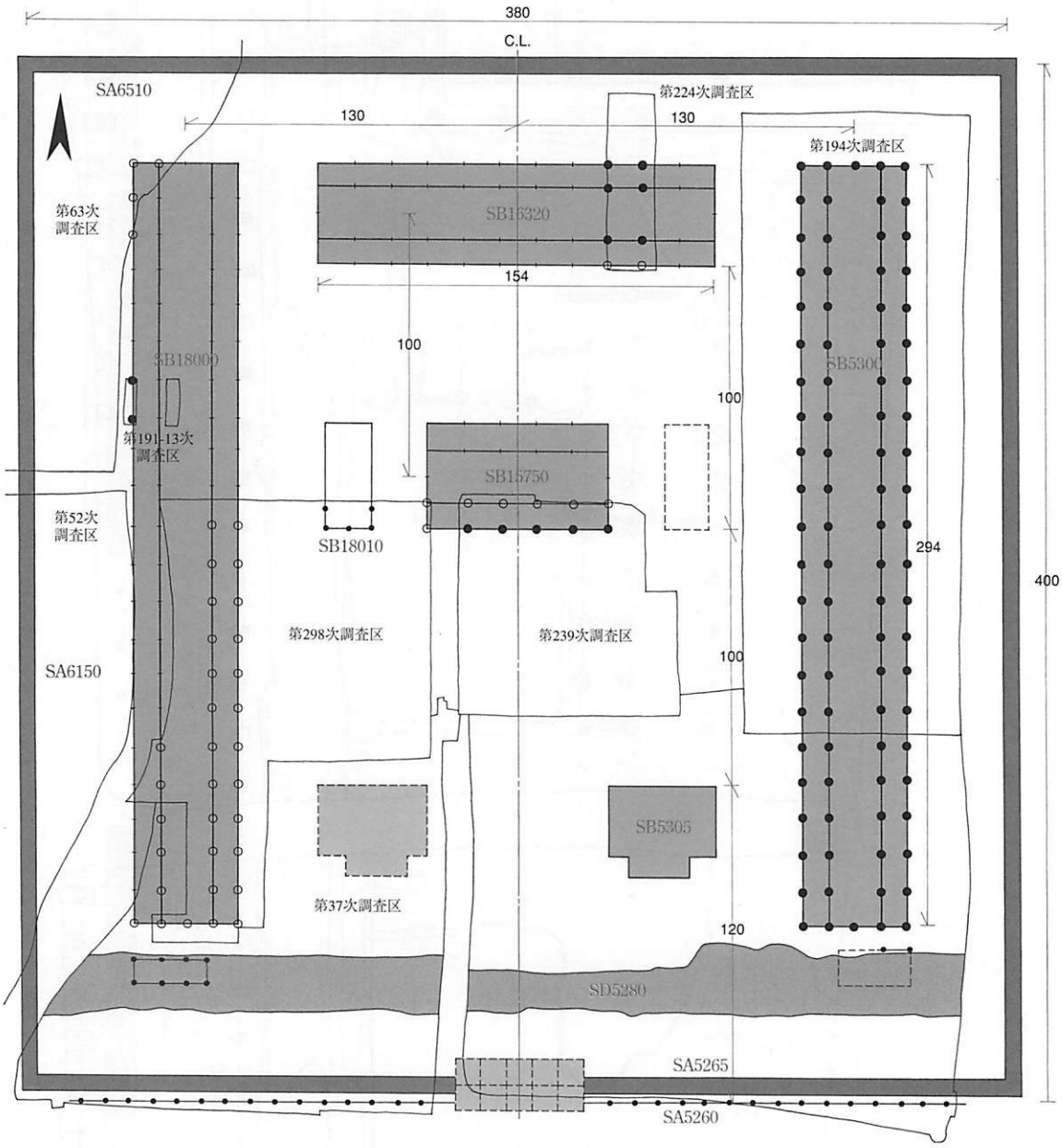

図29　馬寮東方東区の建物配置（単位：尺）　1：800

にこだわらず、日常的な仕事をするのに適した配置にしたものであろう。それに対して、対称配置のものは、大極殿と朝堂院がまさにその配置をとることや、兵部省を淳仁天皇が一時御在所にしたことなどを考えると、公的な行事を行なったりする、ある程度儀礼的な空間であったと推定される。その中で馬寮東方地区は規模が格段に大きく、内裏、大極殿、朝堂院を除けば、平城宮内の左右対称配置パターンの施設では最大のものである。

この一画の具体的な名称をうかがわせる文字資料はこれまでの調査では出土していない。しかし、その立地と建物配置を考えると、『続日本紀』天平10年7月癸酉条や『万葉集』巻8に出てくる、西池（佐紀池）の近くにあり、宴会を行なった「西池宮」が有力な候補となる。この地域は佐紀池に近いということと、左右対称に建物を配する大規模な施設であることから西池宮の可能性が現状では強いが、その決定は今後の検討課題である。いずれにしても、今回の調査で馬寮東方地区の構造と建物配置が明らかになったことは、平城宮の官衙や宮殿など、さまざまな区画の性格、機能を研究する上で、重要な成果であると言える。

（玉田芳英）

注）概報ではSA5340となっているが、塼積官衙南門と番号が重複しているため、改称する。

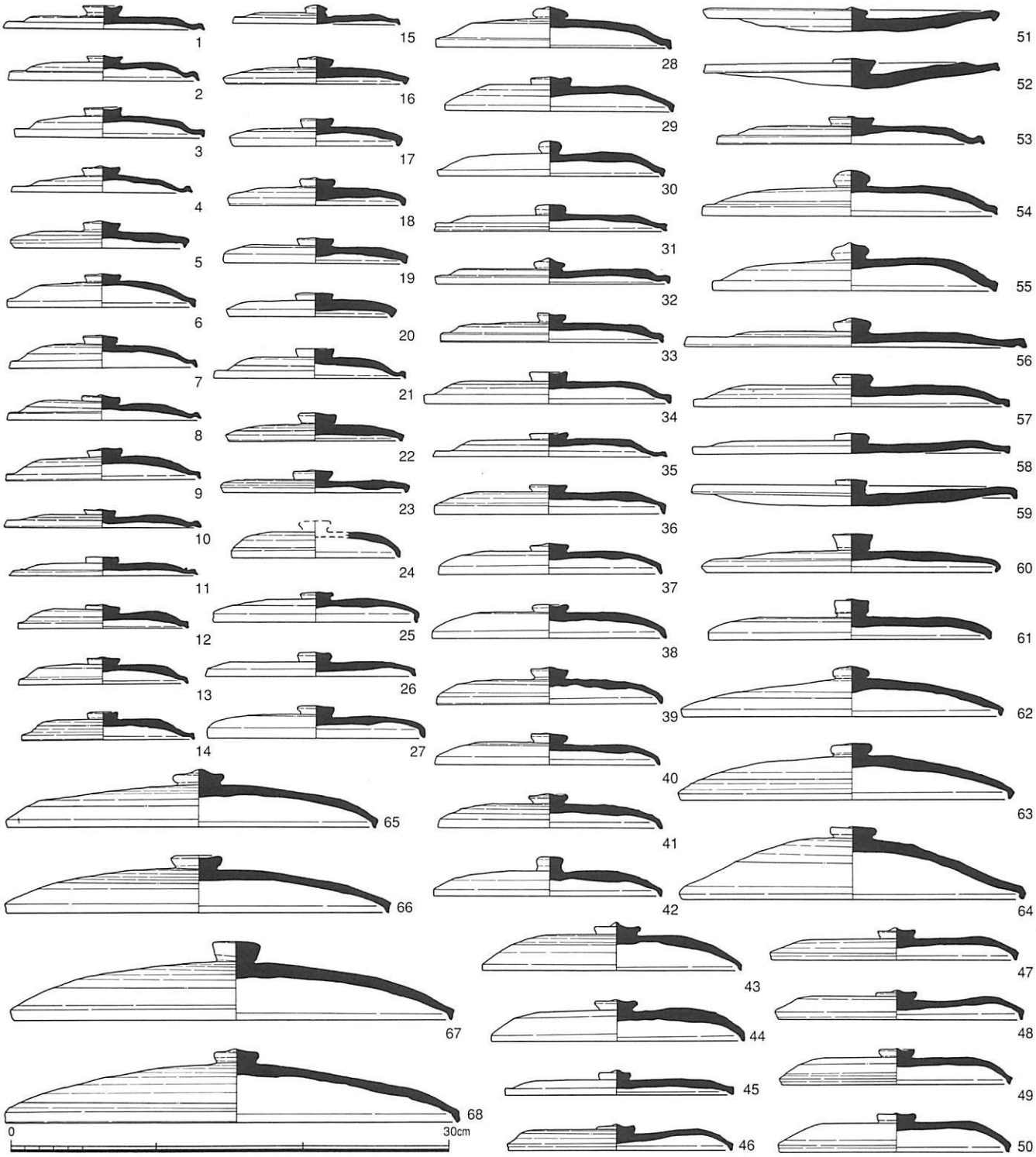

図30　SK5283出土土器（1）　1：4

5．SK5283出土土器

第37次調査区で検出した土坑SK5283は基幹排水路SD5280の北岸に位置し、径約２ｍを測る。出土土器のうち、土師器は杯Aの細片が1点と甕の破片が約20点あるのみで、ほとんど全てが須恵器である。須恵器は544個体以上あり、その構成を表５に示した。杯B蓋が345個体で63.4%を占め、転用硯は１点も見られない。この様な構成の土器群は馬寮東方地区の何らかの性格を反映していると考えられるが、詳細は今後の課題である。ここでは紙数の制限のため、実測図をなるべく多く掲載することを主眼とし、説明は器種ごとに簡単にとどめる。

杯Ｂ蓋（1～64･69～145）　器形、胎土、調整、焼成などの面からいくつかのグループに分けることが可能で、大きくＡ～Ｈ群とそれ以外に区分した。この群は従来の須恵器Ⅰ～Ⅵ群に完全に対応するものではない。

A群　白色粒、黒色粒を含む胎土を持つもの。焼成の具合により、A1群～A4群に細別できる。A1群（１～５）は表面は青灰色、断面はセピア色を呈し、硬く焼きしまる。A2群（６～14･51･52）は淡青灰色を呈し、A1群に比して

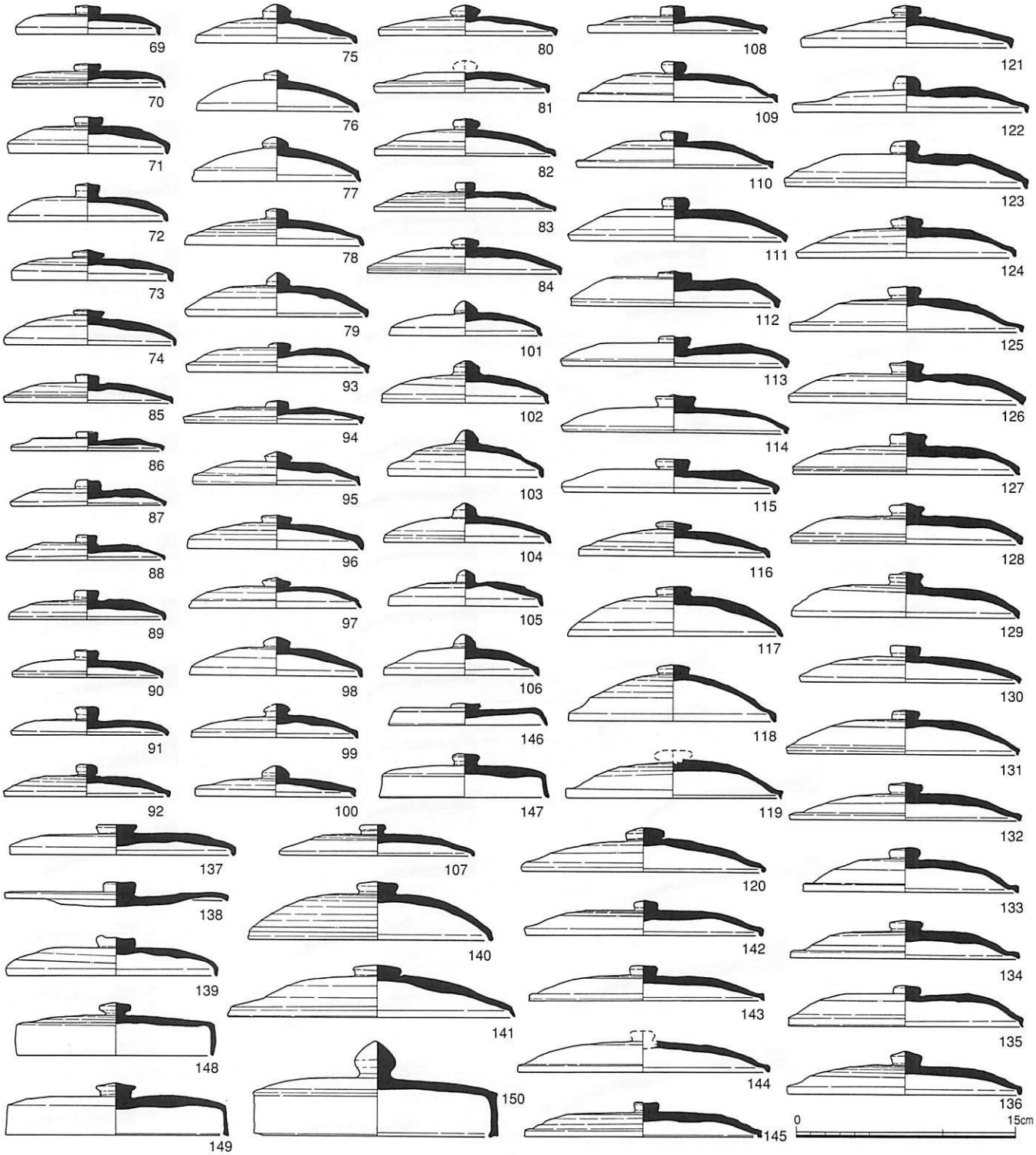

図31　SK5283出土土器（2）　1：4

器壁が薄い。A3群（15·16·28～33·54～57）はやや軟質に焼き上がるもの。A4群（17～2·34·35·53）は焼成が不良で、灰黒色や灰白色を呈する。

B群　青灰色や灰白色の胎土で、多量の黒色粒子と白色粒子を交える。黒色粒子はナデや削りで墨を引いたように流れる。硬質に焼きあがるB1群（22～24·43～45）とやや軟質で白色粘土を含むB2群（46～50·58）に分かれる。

C群　灰色～淡青灰色を呈して極めて硬質に焼きあがり、C1群（25～27·59·60）、C2群（36～42·61）に分かれる。C1群は水簸した様な胎土で、砂粒をほとんど含まず、C2群は石英、長石や黒色粒子を少量含む。

D群　白色～灰色を呈し、多くの石英、長石粒と少量の黒色粒子を含む。D1群～D4群に分かれる。D1群（62～64·119·120）は内面が平滑で、端部を丸くおさめるもの。D2群（80～84·121～125）は内面の仕上げが粗いもの。D3群（126～130）はやや軟質で、黒色粒子が流れる。端部には浅い沈線を入れる。D4群（108～111·131～136）は白色～青灰色を呈し、多くの白色・黒色粒子を含む。

E群（142～145）　暗青灰色を呈し、特に多くの黒色粒子を含む。つまみは小型である。

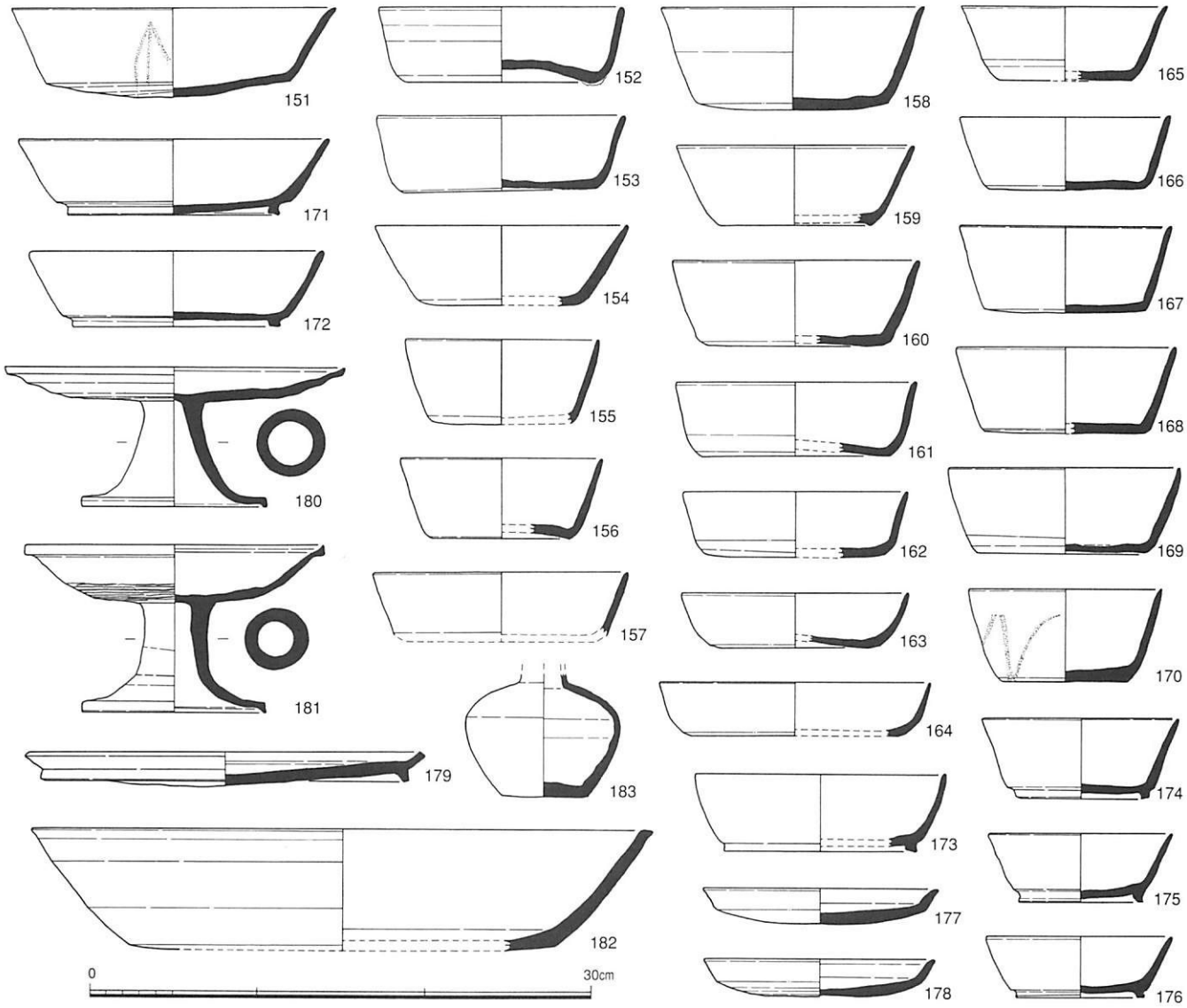

図32　SK5283出土土器（3）　1：4

F群（69～74·112～115）淡灰色～淡黄灰色で、白色・黒色粒子は少なく、内面は平滑である。

G群（75～79·116～118·140·141）灰黒色を呈し軟質で、白色・黒色の微砂粒を多く含む。

H群　硬質に焼きあがり、内面は灰白～青灰色を呈し、外面に降灰が見られる。白色・黒色粒子を含む。つまみは多様な形態を示し、H1群～H4群に分けられる。H1群（85～94·107）は灰白色でつまみは円柱状、H2群（95～100）は青灰色でつまみが算盤玉状になり、黒色粒子は極めて少ない。H3群（101～106）は淡青灰色でつまみは乳頭状のもの。H4群（137～139）はその他を一括した

これらの群別は産地の差を反映したもので、従来の群別との比較ではA群がⅠ群、B群がⅡ群、C群がⅢ群、D1群がⅥ群にほぼ対応する。D2群とD3群の一部（80·81·122～129）は備前産の可能性が強い。A～H群に属さないものも130個体以上あるが、今回は割愛した。

ⅢB蓋（65～68）　65はB1群、66はB2群、67はC1群、68はG群に属する。66は尾張産の可能性がある。

151～170は杯Aで、158～170は底部をロクロ削りする。170は底部外面に「×」の線刻がある。

171～176は杯B、177·178はⅢA、179はⅢD、180·181は高杯、182は盤A、183は壺M、146～150は壺蓋である。なお、土器の産地については総社市教委の武田恭彰氏、各務原市教委の渡辺博人氏に教示を得た。

（川越俊一・玉田芳英）

表5　SK5283出土須恵器の構成

器種	個体数	比率(%)	器種	個体数	比率(%)
杯A	120	23.2	盤A	8	1.5
杯B	19	3.5	壺A	1	0.2
杯B蓋	345	63.4	壺A蓋	1	0.2
ⅢA	5	0.9	壺M	1	0.2
ⅢB蓋	19	3.5	壺	5	0.9
ⅢD	2	0.4	平瓶	1	0.2
鉢A	5	0.9	甕	5	0.9
高杯	1	0.2			
			計	544	100.1